

浄土

1982-5

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和五十七年四月二十五日印刷

第四十八卷

五月号

第三種郵便物
郵政省（郵政特准私設郵便物）
昭和五十七年五月二十日
五月号





花は紅、柳は緑



「花は紅、柳は緑」という、その哲学的な意味はさておいて、初夏の野山は実に美しく輝いてみえる。四季の変化にめぐまれ、我々日本人の目には当然と映るこの緑も、砂漠の国々では、なみだぐましいまでの人工的な努力がなければ得られるものではない。かつて西ネパールの谷を下った時、二、三百メートルもあろうかと思われる岩肌を遠望し、その景観にうたれると同

時に、草一本見えぬ絶壁に、なんとも寂寥たる気持に襲われたことであった。

ところで、阿弥陀経をひもといてみると、極楽の美しく整ったありさまを記す中に、「池の中に蓮華あり、大きさ車輪の如し。青き色には青き光あり、黄なる色には黄なる光あり、赤き色には赤き光あり、白き色には白き光ありて、微妙香潔なり。」と述べる一節がある。蓮の花の汚泥より出でてなお美しく清浄なることを思つての表現であらうが、ここでは青き色に青き光あり以下に心をひかれる。宇宙の万物すべてが因縁によって生ずるところのものならば、青き色に青き光があるのが自然のあらわしである。そして自然の青空、青い海は何ともいえず美しい。しかし人間の世界は、時として自然の光、自然の色をいつわる。汚染された川水は黒く、白砂に石油の残滓がおしよせる。黄色の漬物はますます黄色に輝き、冷凍のグリーンピースも、あやしげな緑の色を見せる。人々の心も又、すなおな自然の色彩を忘れて「造り出された」色にひかれて行くかの如くである。

桜が散り、牡丹も花を落した。いちようの若葉と、池に泳ぐ金色の鯉が美しい季節である。自然の色合いを大切にしていきたい。

五月号



弥陀の智願の海は、深く広く涯底（はてそこ）なし。

——『無量寿経』歎仏頌

目次

勢至丸さまを想う

- 仏性の開花を教えられた法然上人……………須藤隆仙…(2)
- 生まれたことの尊さ……………遠田弘俊…(7)

① ② ③ ④

- 釈尊と法然上人……………村瀬秀雄…(12)
- 深川にみる江戸っ子気風
- 外国にはない下町のノウハウ……………細田隆善…(14)

- エッセイ 大臣……………合島近…(21)

- 子供のころ……………江島俊雄…(26)
- 詩・・・いのちの誕生……………清川宗治…(11)
- <読者のページ>
- 仏法僧……………島田信一…(32)

- 浄土句集……………一田牛畝選…(30)

- <表紙裏・巻頭言> 花は紅、柳は緑……………佐藤良純

- 念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺内大吉…(38)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

勢至丸さまを想う

仏性の開花を教えられた

法然上人



須藤隆仙

(函館市称名寺住職)

膨大な内容の仏教大辞典を編纂され、のちに浄土宗管
長・知恩院門跡になられた望月信亨博士は、その名著

『浄土教概論』の序文中に、「今本書に於て諸仏及び浄土

の成立等に就き纏説を試みたのは、浄土教が大乗仏教の精華であることを明らかにせんとするの意に出でたのである」と述べられ、本文中にも「大乗仏教の精華」なる一項を設けられ、浄土教こそ大乗仏教の精華であること
を強調されました。

そのことは、すでに法然上人が全生涯をかけて実証な

され、浄土の教を一宗に大成なされて、日本に於ける「念仏の元祖」となられたのであります。望月博士は近代科学の上からこれを論証されたのであります。

法然上人によって大成された浄土宗義は、全仏教を基盤として、その上に築かれたピラミッドでありました。ですから上人は、全仏教の個々の教えを非常に大切にされたのであります。

たとえば上人は『三部經大意』のなかで、「華嚴の三無差別、般若の尽淨虚融、法華の実相真如、涅槃の悉有仏性、たれか信ぜざらん。これも仏説なり、かれも仏説なり」と仰せられておられます。

別けても、生きとし生けるものは、すべて生まれながらにして仏性があるとする『涅槃經』の悉有仏性の説は、浄土教の基本となったものであります。

二

去る三月七日のNHK教育テレビ宗教の時間に、浄土教学の泰斗・服部英淳博士（大正大学名誉教授）の『仏のいのち』と題するご高説がありました。石上善応大正大

学教授がいろいろ質問するかたちで話が進められました。そのなかで服部博士は、「我とは仏性なり」と仰せられて、この凡夫としての我が実は仏性の主体であること、その仏性とは仏さまから戴いてきている「いのち」であること、釈尊降誕の「天上天下唯我独尊」の教えも、ここに真意があること、法然上人の教えも、我に於ける仏性の開発を眼目とされることなどを、諄々と説かれ、大変貴重な内容であられました。

「我とは仏性なり」とは、服部博士の高著『浄土教思想論』によりますと、『大般涅槃經』第七に、「我とは即ち是れ如来蔵の義なり、一切衆生には悉く仏性あり、即ち我は是れ我の義なり。是くの如き我の義は、本より已来、常に無量の煩惱の覆う所と為る。是の故に衆生は見るを得ることを能わず。善男子善女人、貧女人の舎内に多く真金の蔵するあり、家人大小も知る者あることなきが如し」とあるものであります。私たちは折角、仏性という黄金の宝物を有しておりながら、煩惱に邪魔されて、それを知らないでいる、それを知らせてもらうのが、仏さまのみ力であり、お念仏であって、極楽浄土に往生させていただいて、その仏性が顕われ、他を導く力

が發揮されてくるわけでありませう。

それ故に法然上人は、『選択本願念仏集』の冒頭に、先ず道綽禪師の『安樂集』の「一切衆生みな仏性あり（中略）何によりてか今に至るまで、なお自ら生死に輪廻して、火宅を出でざるや云云」の文を掲げて、聖道門を捨てて浄土門に帰することを勧められたのであります。

三

仏性とは覺性ともいい、仏になる可能性のことです。つまり平たくいえば、仏になる種のことです。

仏教大学教授の坪井俊映博士は、『法然浄土教の研究』というお著書のなかで、法然上人のみ教えは、罪惡生死の凡夫としての自分を自覺することであり、「自己の罪惡を深く内省する人は自身が救われ難い存在であり、罪業により仏より遠く離れたものであるとするが、しかし、この人は仏に一番近い存在であって、仏の大慈悲によつて一番最初に救済される人である」と述べておられます。そして、その罪惡を自覺する主体が仏性であると

して、次のように説いておられます。

「罪惡を罪惡として自覺する主体に仏性の存在が考えられる。仏性とはサンスクリット語ブッダター（Buddha-）の訳で、如来性、覺性ともいわれ、仏になる可能性、因性のことである。そしてそれ自体清浄なものであって、善性のものとされている。浄土教にては浄土に往生してのち、菩薩道を成満して悟りに入る主体と考えられるものである。凡夫がもし無仏性のものであるならば、それは一闡提の徒と同じであって、たとえ浄土に往生しても、究極目的である悟りに入ることはできない。まして、罪惡なるものはたとえ客觀的にその社会の人々により惡業であり、罪過であると規定されても、その人に反省自覺の念のないときは罪惡を罪惡として意識することがない。（中略）

浄土教において仏性の存在を説かなかったならば浄土願生の心をおこすことが無くなるであろう」

（二闡提とは、成仏の素質や縁を欠くものをいう）

右の如く、坪井先生は、仏性が浄土教の基本となるも

のであることを、明らかにされましたが、実は法然上人はここからみ教えを出発させたのでありました。

四

淨土宗寺院のご出身であられ、偉大なる宗教学者として令名高く、本誌とも縁が深い増谷文雄先生は、昭和五十三年秋、日本仏教鑽仰会主催の清沢満之と現代講演会で、「阿含經と歎異抄」という題で講演をなされ、たまたまそのなかで、法然上人と仏性の問題にふれられ、次のように話しておられます。

「私は、これの『仏性』についてのことを追究してまいりまして、『悉有仏性なり』というこの道理は、つきつめてまいますと、それは煩惱具足の道理だと腑に落すことができた次第です。そして、そのことを淨土門の祖師がたはよく知っておられたのだと、私は思い当りました。

私は、法然上人は何処であのような決然たる選択集の旨を得て来られたのであろうかと、永い間追究して

いたのですが、これでないかという一つの文章を見出しました。それは中国天台の六祖湛然が止観五行の第五卷に、

『仏性とは一法に名付けず、十法に名付けず、百法に名付けず、万法に名付けず、いまだ菩提を得ざるのとき、一切の善惡無記、みな仏性と名づく』

ということばです。法然上人はこれをお読みになったのだと、私はいま、確信をもっていうことができます」

増谷先生もまた、法然上人のみ教えのなかで、仏性の問題が、どんなにか重要であるかということを、喝破されたのでありました。

五

「一切の衆生がみな仏の種をもっている」ということは、極言すれば、「一切の衆生はみな仏に成るべきものである」ということでもあります。仏に成るべきものであるから、それで「仏の種」をもっているのでありまし

よう。「種」というものは、そのものに成るべくして存在しているもので、種が発芽し、開花し、結実して、さらにまた次の種が生まれる、その種によって、また新しい発芽・開花・結実がなされるというように、種そのものは、つねに成長の根源としてあるもので、それらの繰り返しが生命というものでありましょう。

してみると、仏性というものは、仏へと成長していく、つまり仏の生命の根源として存在しているものであり、人間は「仏に成り得」てこそ、はじめて本当の生命を全うしたといえるのだと思います。

法然上人は、このところを教えられたわけでありまして、法然上人によって、すべての人間が、仏性をもっている、その仏性を開花・結実させる方法が教えられたわけであります。それが、お念仏ということであります。

法然上人がこの世に出られました意義を、私はここに見出させていただくものであり、上人のみ教えが不滅であることも、この点にあると理解させていただくものであります。

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『全 訳 法然上人 勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師 観經四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師 六時 礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人 讃仰会

勢至丸さまを想う

生まれたことの尊さ



この日、三月二十九日、大本山増上寺で、故古屋道雄師の表葬の儀が盛大に執り行われた。朝からの快晴に恵まれて、境内の桜の五分咲きも故人を偲ぶに相応しい風情であり、参列者は、宗内は勿論、児童教化に全生涯を捧げた師の終焉を送るに最も有難い人々の姿で埋め尽された。私達は常にその人の一生は棺を覆うて知ると聞かされておりますが、まことにその通りだと今更に思うことでした。師のことは申し上げるまでもないことと存じますが、たまたまこの日午前中に当本山会館で、東京教

とう
遠 だ
田 こう
弘 しゅん
俊

(東京・小石川慈眼院住職)

区役員の会合があり、宗祖降誕記念行事の打ち合せがありました。それは四月五日の教区主催の子供大会に就いてで、まことに思いを新にした事でした。勿論このことと御葬儀とは偶然の一致ですが、何か眼に見えない縁の深さを感じた事でした。丁度その席上予め連絡の上のことだったと思うが、これ又記念行事の一環として、劇「法然」が前進座で公演されるという披露があり、教区長の紹介で、主演俳優の中村梅之助丈の挨拶があった。私は勿論個人的には何等の交渉を持つものではないが、

彼氏の演技は、常に眼に触れる機会があり、この日の氏の言葉で一層の親近感を持ちました。曰く、『私は只今御紹介頂きました前進座の中村梅之助であります。常日頃厚顔ましく皆様方の茶の間に押しかけておりまして、ヨヨイがヨイの「伝七捕物帖」や村田蔵六等の役で御ひいきを頂いておることを有難く存じ居ります。此の度は、私としての大役、法然上人さまを演ずることに相成ったわけであります。これまでの前進座に於ける名僧物語シリーズとして、「天平の薨（鑑真和上）」或いは「親鸞」等々ありますが、浄土宗祖の法然上人さまは、何となく私の容姿に通う点があるやに見受けられたのでしょうか、何とも有難い光栄に存じ居る次第、劇作に当って、上人様の御一生を詳しく知らされれば知らざる程その偉大さに身の縮る思いを致し、到底凡俗の真似ることの出来ないことと恐れております。然しお引受け致しました上は、波瀾多き御一代、或いはその時代を生きた多くの弟子方、庶民の心が、劇を通じて、観て頂く皆様方に少しでもお判り頂き、信仰の上にお役に立てばこの上なき幸せであり、今年を通じて、心魂を打ち込んで行き度い所存なれば、大方の諸上人様にもよろしく御援助御吹聴頂

きますよう平に願ひ上げます』と。一同大拍手で了承ということでした。

私もかつて、宗祖の劇を観た記憶があります。だがいつも聞かされることで、上人の御一生は余りにも偉大でお芝居にはなりにくいということです。勿論芝居とは、何かしら道中物か、股旅物のように感じられ、近松的なことに心が引かれるようですが、本来人間の持っている心とは、美しいもの、清らかなものに憧がれるものだと思うのです。恐しいこと、悲惨なことというものには常に嫌悪感を懐くものと思われれます。だからこそそのことを強調するという風潮もあり得るのでしょうか。言うなれば厭離穢土、欣求浄土、という言葉に替えられることだと思います。

惜而愈々御降誕八百五十年を迎えて、一宗のスローガン「いのちを考える」の一句は、真に「得て如り」と申し上げたい。現代的に言って、これ程重大な言葉があるだろうかと思われれます。私達は一人として自らの意志でこの世に生れたとは思えない。

いつも聞かされている言葉に「人身うけがたし、今現にうく」と、なんとなくすらと言葉の上で聞いてい

る。ほんとうに自分の身の今現にここにあることを不思議に思ったことがあるだろうか。この頃耳にする言葉として、「子供は何人造ったらいいか。子供は生れて出るものではなくて、造って出るものだ」ということですね。全く以て恐るべきことです。親にとって子供とは何か。親とは子供があつて初めて親であり、親としての本来の使命がある。若し夫婦の間に子供が生まれないと仮定するならば、どんなに情けないことか。その結果あちらの名医、こちらの病院へと足を運ぶことだろう。或いは秘かに神仏に祈請することもある。宗祖法然上人の御両親に於かれても既にこのことが遠く御伝記に示されていることです。曰く、「抑も上人は、美作国久米南条稲岡の庄の人なり、父は久米の押領使漆間時国、母は秦氏なり。子なきことをなげきて、夫婦こころをひとつにして仏神に祈り申すに秦氏夢に剃刀をのむと見て、すなわち懷妊す」とあります。尚「かたく酒肉五辛をたちて、三宝に帰する心深かりけり」と。このことが、上人の御出生にいか大きな影響があり、御両親の期待の深かったかは、延いては母としての懷胎中の心のあり方、身の律し方を察するだに身の引締る感じが致します。

今の世に、かかる時代的な物語りを耳にするとしても果していか程の感動を覚える人があるでしょうか。酒肉五辛等と申しても却って一笑に附して、やれ肉だ、やれ卵だ、といった榮養榮養とほしいままにあさっていることではないでしょうか。そして不要の子は闇から闇へと葬って、やがて頼るのは何々地蔵ということになって行く。「子は親の鏡」だと申しますが、子供を教育すること、親となった自分が何であるかということへの反省ではないでしょうか。私達は自分の生きる為に凡ゆるものの命を犠牲にして憚らない。

仏教では基本的に五戒（五つの戒め）を説いていることは周知のことです。その第一が不殺生戒ですね。このことが最初に取り挙げられてあることは、いかに物の命が大切であるかということでしょう。総べての「戒」の根本は「いのち」を守ることでありましょう。

それなのに現代程物の命を粗末にしている時はないと思われれます。自分一人が生きる為に総てを犠牲にする。恐るべきエゴだと思うのです。与えられた命という考えから造られた命への転換、一体これでよいのでしょうか。勿体ないという心は殆んど影をひそめて、当前だ

という考えになりつつあること。「命」の根源を科学的解明に立って、驚くべき事実を実証しているようです。

一例を以てすれば試験管ベビー、或いは人工受胎、或いは排卵済使用、等々は何を物語るものでしょう。そして畑の野菜から温室の野菜、動物の養殖から作る漁業等と、半世紀前までは遠く手の届かなかったものが眼前に溢れるようになって来たこと。背筋の寒くなるようなことが平気で行われていることに深く思いを致すべきではないでしょうか。少し前までは、到る処に放生会という行事があつて、境内には放生池という池もあったが、現代の都会等では恐らく影をひそめているようです。所詮は天恵に反して、自らの生きる力を過信して、与えられたものではなく造り出したものだとの考えが根を張っているように思います。

現代人の心の荒みは、大國間の戦備の競争となり、やがては共倒れの憂き身を見るであらうとは、単なる孤老のたわごとと笑殺出来るでしょうか。この時こそもう一度、勢至丸さまの御誕生に思いを回して、八百五十年の聖辰を迎えたいものです。

いつの時代でも「いのち」を大切にしなければならぬ

ということの課題は論ずるまでもないことですが、その「いのち」が自分だけの命を守ることではなく、一切のものの命を守ること、既に私達浄土宗徒ならば充分納得出来ているわけです。「願わくは諸々の衆生と共に」とあり、勢至丸さまの父上が最後に臨んで「汝さらに会稽の耻を想い、敵人をうらむ事なかれ、これ偏えに先世の宿業なり。もし遺恨を結ばば、その仇世々につきがたかるべし。しかじはやく俗をのがれ家を出でて我が菩提をとぶらい、みづからの解脱を求めんには」と。上人の出家の動機は、命ということの大切さを、ただ自分だけの目的ではなく、敵も味方も、一切のものの上に及ぼすということが肝要だと示され、やがて浄土開宗へのスローガンともなったことに深く想いを致すべきです。

五重相伝に参じた人ならば御承知の通り、座具の伝を想い起して頂きたい。信仰に入る時は自分一人だが、入信の上は必ず隣人と共であり、一蓮托生の理想を成就することこそ大目的でありましょう。

一見華麗に見える現社会の中で、何と「いのち」の粗末に扱われているかを想う時、朝夕仏前に拝跪して、願共諸衆生、往生安樂國の念を合掌せずにはいられない。



いのちの誕生

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

新緑の芽吹き

新しい“いのち”の季節

青葉の輝き

生まれて育つ“いのち”の尊さ

すべて“いのち”あるものは尊し 麗わし

優しいところ 美しいところ 明るいところ

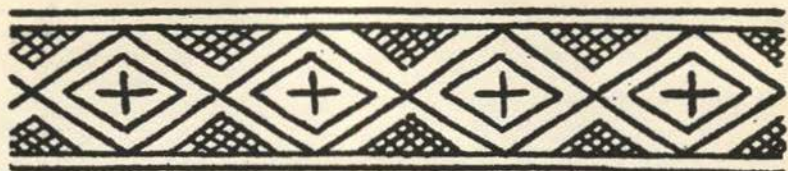
太陽に光り輝いて すばらし

“いのち”のありがたさ

“いのち”のゆかしさ

若葉繁れる中で

新しい誕生のことを想う



(一) (口) (法) (話)

人上然法と尊釈

お 雄 秀 ひで 瀬 村 せ むら

釈尊は藍毘尼園に降誕されると直ちに七歩を歩んで迷いの世界である六道を超えたことを示した上で、この世の苦しみを救うであろうと宣言し給うた。それから一六九七年を経た長承二年（一一三三）四月七日に法然上人が美作の国（岡山県久米郡久米南町）で誕生遊ばされた。折から館の上には紫雲が棚引き、屋敷内の西方にあって根元が二つに分れてこんもり茂った椋の木の小枝に、どこからか飛んできた真白い二流れの長旗が垂れ下った。勅修御伝には「このような端相は必ずや深い因縁があったからであろう」と記している。

釈尊が降誕してから七日を経た時に、生母摩耶夫人はこの世を去った。釈尊にとって自分が生れたことよって、生母の命が失われたということは、生涯を通じて片時も忘れられない痛恨事であったに相違ない。釈尊の出家の動機は四門出遊によって老病死の実態を目撃し、沙門の道を選んだのであった。しかしその前に釈尊の心の中には生と死とに関連した問題、有限と無限との対立という難問の悩みがあったからこそ、誰でも知っている日常のでき事をみて、人並でない感銘を受けたのであった。法然上人は幼い頃から西方に向って座り、手を合せ

る癖があったにしても、出家の動機は父時国の非業な最期と遺言とであった。上人は比叡山に登るに際して、別離を嘆く母親に「迷いの世間を厭って仏の道に入り、やがては真実を悟ることこそ真実の報恩であります」と慰めている。

釈尊は広く八万四千の法門を開いてあらゆる人々の素質と環境に適応させ、遠く未来の人々までも救い給うた。その中において念仏の法門を永遠に弘通させることを説き、阿難に遠い未来にまで念仏の教えを流通させるようにと命じ給うた。法然上人は八万四千もある法門の中からただ一つ易行道浄土門を選びとり給うた。そして知恵のある者も知恵のない者も同じように、善人も悪人も区別することなく、すべての人々がただ念仏の一行によって必ず救われるという法門を開いた。これこそまさに釈尊出世の本懐を顕揚したのであって、この点から法然上人こそ釈尊以来の釈尊であったといわなくてはならない。

釈尊はこの世を照らす太陽として降誕し給うたが、法然上人は無縁の大慈悲という仏心を体して、あらゆる地方を優しく照らす中天の明月になり給うた。建暦二年正

月三日に、法蓮房信空の問いに対して「自分の遺跡は全国津々浦々に行き渡るであろう。何故ならば念仏の法門を広めることは愚老が生涯を通じて勤めてきたことである。されば念仏を唱える者がいる所は貴賤を論ずることなく、海辺にある漁師の小屋に至るまでがすべて自分の遺跡となるのである」と答え給うた。

また上人は次の一句によって、『選択集』の結語としている。

「月が地上に降りたわけでもなく、水が天上に昇ったわけでもないのに、月と水とが一体となって水面に清らかな輝きを宿している。それと同じように念仏を唱えれば仏の本願力に乗ることができるのであるから、仏と行者とは一体となって往生できるのである」

思えば今から八五〇年前に法然上人がご降誕になったことは、この世に仏心が行き渡るようになった因縁となったのである。だからこそ現に慶讃記念が営まれるゆえんである。



深川にみる江戸っ子気風

— 外国にはない下町のノウハウ —

細^{ほそ}田^だ隆^{りゅう}善^{ぜん}

(東京・深川勢至院住職
江東史談会長)

江戸文化は下町を中心として発展したが、深川はその代表的な下町。祭り、木場、花町など、日本の伝統と江戸っ子気風を、いまでも残す町である。

◎下町の発生

東京の下町は、外国によくみかけるダウン・タウンとはいささか意味が異なる。現在は山の手に対して下町と

いうか、東京の山の手は国電山手線ができてからよく使われるようになった。江戸時代には下町という言葉はよく使われたが、山の手という言葉はまれにしか使われていない。

江戸時代は、下町には武家屋敷よりも町屋が多く、武

下 町

大江戸（明治11年 東京15区）

下 谷

京 橋 日本橋 神 田 浅 草
深 川 本 所

江戸の人口

区 分		面 積		人 口	密 度 (km ² 当 たり)
		km ²	%		
江戸時代	武家地	59.97	68.58	650,000	10,838
	寺社地	13.65	15.61	50,000	3,663
	町地	13.82	15.81	600,000	43,415
	合 計	87.44	100.00	1,300,000	14,867
	東京15区 (明治11年)	87.44	—	799,991	9,149
東京相当区地 域(昭和50年)		87.44	—	1,440,959	16,479

一下町の範囲一

下町と呼ばれてきた区域は、現在の東京の原型である、明治十一年に創設された東京の十五区のうち、下谷区（台東区）、浅草区（台東区）、神田区（千代田区）、日本橋区（中央区）、京橋区（中央区）、本所区（墨田区）、深川区（江東区）の七区の区域で、東京のほぼ半分である。そのうち東京の発展により、三十五区に拡大さ

家に対して、謙り、下町と称した。また下町は江戸の城下町（しろしたまち）の意味を持つ。すなわち江戸は天下の大將軍の居所であり、そのお城のお膝元であるという誇りの意味を持っている。江戸っ子は言葉をつめる気風があるので、その城下町が下町となった。下町は、下町に多く住んでいた市民のプライドに発生した言葉である。

ただ外国のダウン・タウンと共通する意味は、下町か

◎下町の範囲

らその都市が発展したという意味がある。都市の多くは河川の下流、デルタ地帯に発生しているからである。

江戸は武家の町といわれたくらい、武士とその関係者が多く住み、市民と武家関係の人口はあい半ばしていた。市民の多くは下町に住み、下町に江戸の風俗、趣味、いなせな氣質、江戸っ子気風が醸成されてきた。

れ、現在の二十三区に移行したものである。この発展に伴い、下町といわれる範囲も広がって、今では江戸川区あたりまで東京の下町というようになった。この最初の十五区の区域が、昔の大江戸の区域であった。

この大江戸は明暦三年（一六五七）の大火後、本所深川方面を埋め立て、江戸の市街地を拡張、元禄末年（二七〇三）にはほぼ完成をみた。明暦大火後の大江戸建設事業は、江戸時代最大の建設事業であった。これにより本所深川の市街地ができ、広小路（グリーンベルト）を橋の周辺、街区に作った。木置場、言葉をつめて木場という。木場を永代、佐賀、福住、清澄の永代島の一か所に集中し、元禄十四年（一七〇一）現在の木場に移転した。またこれは神社仏閣を都心部から周辺部に移転させた事業であった。

◎江戸は世界の一人口

江戸の人口は百三十万に達し、世界一の人口となった。これは寛永十二年（一六三五）参勤交代の制度と妻子在府の制度が確立されたためであって、産業革命後しだ

いにロンドンもパリも都市に人口が集中するようになったが、江戸はすでに世界一の人口を擁していた。江戸に泰平がつづき、ここに江戸特有の文化が発生したのは偶然ではない。日本中の富の半ばが江戸で消費され、江戸は一大消費都市であったからでもある。

そして江戸文化は、下町を中心として発展した。歌舞伎芝居、講談落語、俳諧川柳、絵画浮世絵、江戸文学、江戸音曲などが盛んとなり、また神社仏閣では、祭礼、相撲、開帳、講中、縁日などが催されて、しだいに江戸っ子気風も高まったのである。

◎下町は人口過密

江戸市民の相互扶助、義理人情の江戸っ子気風を高めたのは、江戸下町の人口の過密状態にもよる。江戸の人口は当時世界一、百三十万にも達し、下町は一平方キロ当り、実に四万三千四百十五人という過密人口であった。その人口密度を明治十一年と昭和五十年にくらべてみると、明治十一年の東京の平均密度の約五倍、昭和五十年の約三倍に当たる。



一ひしめき住む下町一

深川方面には二十軒長屋、三十軒長屋などがあり、庭もない狭い家屋に市民はひしめいていた。このような社会構造の生活の中では、隣人助け合いの江戸っ子気風が自ら醸成された。

さらに、ゴミ処理の問題と祭りの経費の負担から、各町では自治制度の気風が向上した。これも下町を中心として発展した思想である。とくに老中首席松平定信が町法を改正し、町の自治制度をすすめ、名主のもとに共同責任制をとり、隣人愛を高揚し、町内の親睦を厚くしたことによる。

わが町をきれいにし、道路の清掃や水を打つのは当然の習慣となり、江戸を訪れたフィリピンの長官は町が清潔であるのに驚いたという。

この自治制度は、明治時代になっても受けつがれた。明治十一年東京に十五区が創設されたときも、区が財産権を持ち、区会議員を選挙する自治制度が確立され、これが特別区の制度にまで発展し、現在の制度となった。この特別区の制度は、東京だけでなく他の都市にはない自治制度である。下町を中心として発展した江戸時代の町内制度が、現在の行政制度にまで影響を与えるに至ったも

のである。

◎向こう三軒両隣り

社会生活の場における最小のコミュニティは、とくに江戸時代に親睦さを増した「向こう三軒両隣り」である。文化生活が向上した現代でも、日常生活の中で親しくつきあう隣人は数軒にとどまる。自宅の両隣りと道路向こう側の三軒が、おおむねその基準である。職業、親類などの関係から隔てたところでも親しい隣人もあるが、町会全世帯と親しくしているわけではない。ここでは道路も重要な意味を持つてくる。

向こう三軒両隣りの六軒の人口構成は、約二十四人、これが人類の基礎的な集団生活でもあり、人体の感覚構造もこのような集団に適応している。

先年、アフリカを一月ほど調査する機会があった。アフリカのジャングルの僻地において動物の社会性を研究しているグループがいた。ゴリラは食糧豊富なジャングルでは生活の進歩の跡はみられない。サバンナを横断したり、脱落をして苦難の道をすすむとき、生きるため

の工夫の進歩の跡がみられるという。このゴリラが集団生活をする単位は、二十四から三十四である。この集団生活に適した五感機能がゴリラに備わっている。

人類の社会生活のルーツをたどると、向こう三軒両隣りの生活単位が、われわれの社会生活の最小のコミュニティである。江戸の下町では人口の過密状態の生活が続いたことから、トイレか井戸を共用する共同生活が生まれ、隣人愛が強く育まれたのである。

◎下町は祭り好き

下町は祭り好きである。とくに深川の八幡祭りは江戸時代から有名である。本祭りとなれば百万人の人出となる。神輿の数の多いことと大きいことで有名、昔から木場や倉庫業に従事する担ぎ手が多いからである。

先年、拙宅を修理していた大工が、町会神輿が回ってきたとき、仕事をやめて飛び出し神輿をかついで帰ってきた。掛け水にびしょりぬれて「ああ氣持がよかった」とつぶやいた。下町は男女を問わず祭好き、近年は女性の担ぎ手も多く、見物客の目を引く。



—木場町を担ぐ神輿—

◎木場の繁栄

東京の産業の中で、江戸時代から三百年繁栄を続けてきたのは、木場の材木業である。元禄十四年（一七〇二）木場は、元木場から現在の木場に移り、昭和五十一年その大半が、新木場へ移転した。この木場にきつぶの好きの江戸っ子気質が、今日も伝承されている。

小名木川下流地帯一円に昔から倉庫業、雑穀業が発達し、江戸の生活物資が集積されてきた。そのため現在もこの付近に倉庫業が多い。このような仕事にたずさわる人々にも、江戸っ子気風が残っている。

◎辰巳の花町

江戸中期から末期にかけて、深川辰巳の花町は吉原花町よりも繁栄をした。辰巳の花町は深川八幡宮周辺七カ所に散在し、文化文政のころ最も繁栄し、天保十三年（一八四二）、弾圧を受け一時さびれた。明治になっていく分また復興をみた。

辰巳の花町で有名なのは、辰巳芸者である。宴会に歌舞音曲が必要となり、江戸中期から辰巳芸者がもてはやされるようになった。辰巳芸者は羽織芸者とも単に羽織ともいい、薄化粧、衣装は簡素、芸一筋を大切とし、男性の源氏名を使い、男前いきなスタイルであった。この気風をきゃん、いなせ、いさみ、なさけなどといい、江戸っ子気質である。

この辰巳芸者が全国芸者のもととなった。

◎下町に社寺が多い

下町には神社仏閣が多く、しばしば出開帳が行われ、江戸の市民を集め、縁日、初詣、節分などに人が集まり江戸情緒が伝承されてきた。

江戸っ子はおこりっぱいが世話好き、お人好し、頼まれると断れない、言葉は粗雑、理屈より感情が露出しやすい気質を持っている。現今の深川には団地生活の人が多くなったが、それでもまだ江戸時代からの江戸っ子気質が随所に残されている。

Ⅱ好評Ⅱ

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。
すでに三版を重ねて、好評発売中。

B6判 二三〇頁 価一五〇〇円
(千二百五〇円)

(申し込み先)

〒381-12 長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二

大臣

役所には、記者クラブというのがある。それも一つではない。多いところは三つも四つもある。普通の、いわゆる一般と、専門紙とか業界紙とかいわれる新聞が、いっしょになるときは、まずないし、古くて大きな役所では、いくつもの専門クラブが、それぞれ独自の歴史を持って存在している。

通産省のように、幅広い役所では、同じクラブ内でも、エネルギーあり、化学あり、繊維あり、食品あり、それに貿易ありで、共通する部門がすくない。自然、グループ活動みたいなことにもなる。幅

合ごう
島じま

近ちかし

(電気タイムス社長)



広いだけに、懇意になった役人さんが、あっちこっちのポストへ飛ぶと、それにつられて、こっちもいろんな勉強をさせてもらえる。その点ありがたいのだが、大きなために不満な点もすくなくない。その一つが、大臣にめったに会えないことだ。

そこへ行くと、科学技術庁みたいには、小じんまりした役所は、ぐあいがいい。

改めて勘定してみたら、科学技術庁だけでも、二十五人の大臣さまとお会いできたことになる。

科学技術庁というところは、順番待ちの胸が割り

ふられる場合があるかと思えば、とてつもない大物が坐る場合もある。佐藤（榮作）さんや三木（武夫）さんは、そのあと総理大臣になったし、中曽根（康弘）さんや二階堂（進）さん、それに、いまの中川（一郎）さんも、同じコースに乗らんとも限らない。

せっかく、多くの大臣にお会いできても、残念ながら、印象深く残っている人はすくない。なかには、一覧表をみて、そんな人もいたかと、うろ憶えの人もいる。

私が、まったくのかけだしで接したのは中曽根さんである。よくもまあ、あんなにいろんなことを知っていて、しかも、よく整理された言葉で答えられるなあ、と感心したものである。いまから二十五年前、当時の中曽根さんは、青年将校とも呼ばれ、まさにバリバリだった。いまでも、この人ほどうまく答弁できる人は、そうざらにはいい。

中曽根さんで、妙に印象深く残っているのは、その退任時である。おしぼりを、ゆっくり顔に当てながら、政権の移動によって、退任のやむないことなどを、卒直に話してくれたあと、これからの科学技

術振興の大切さを力説し、「だからぜひ専任大臣を」と、強く希望をのべて去って行った。

若い大臣の初体験だったせいだろうか。いや、私に不慣れだったからに違いない。それとも、その後任が、中曽根さんの強い希望にもかかわらず、また兼任になってしまったせいかも知れぬ。

昭和四十七年の夏、その中曽根さんが、十二年ぶりに科学技術庁に戻ってきた。今度も通産との兼任である。で、私は、なぜ兼任を受けたかを聞いてみた。「おもしろそうだから」というのが、その答えである。私は気に入らなかった。そこで、「実はー」と、質問の理由をのべた。そしたら「自分が育てた役所が、どんな成長をしているか見たかったら」と答え、そんな長居座るつもりのないことまで明言した。

その後任は、ほかでもない、わが親分の荒木（万寿夫）さんである。中曽根さんとは、うって違って、細かいことなど聞こうものなら、「そんなこと、おれに聞いたって知らん」とぶっきらぼう。

この荒木さんでは、愉快な想い出がある。

晴海のある展覧会を、大臣が見に行くというの
で、記者団が同行したときだ。ひと通り見学したあ
と、一ぶくというわけで、みんなにジュースがふる
まわれた。と、荒木さん、よっぽど喉が渴いていた
とみえ、いきなりごくごく飲みなしたかと思うと、
カラのコップを私の前へ突き出し、「おい、水汲ん
でけ！」といったものだ。会見中である記者団の一
人を、大臣がこき使う例はまずない。わけを知らない
随行の職員はあわてていたが、私には楽しい想い
出である。

池田（正之輔）さんは、一時、新聞ざたにもなった
りして気の毒だったが、じかに接すると、なかなか
親しみやすい人だった。

まだ国会前の木造庁舎だったころだ。私が、トイ
レで用を足していたら、「オス！ どうだい」と声
をかけてくれ、二人並んで、窓ぎわの新緑を眺めな
がら、行く春を惜んだことを想い出す。

いつだったか、お座敷懇親会の機会があったが、
出番がくると、ちゃんと唄もうたう（うまい）し、会
を盛り上げる。上品な美女が、踊りの最後で全裸に

なるのだが、その瞬間、ライトがパッと消える。そ
れに、最も不満らしい態度を示してくれたのも、ほ
かならぬ池田大臣だった。

これにくらべ、三木さんの席では、全然盛り上が
らなかった。だいたい三木さんは、会見のときで
も、「慎重に」とか「前向きに」とかいふセリフが
ほとんど、ちっともおもしろみがない。

ただ、当時、原子力局長だった佐々木（義武）さん
が、「三木大臣は頭がいい」と、しきりに持ち上げ
ていた。この佐々木さんが、三木内閣の科学技術庁
大臣になったのも何かの縁か。

佐々木さんの話は、ご存じのお国なまりのせい
でなく、実にユーモラスだ。言葉のユニークさもさる
ことなく、

「間」のとりかたが天才なんだろう。
この人の話のおもしろさは、活字では表現できな
い。

佐々木大臣のとき、若い活発な記者がいて、会見
中、大臣に議論をふっかけるようなことをした。た
とえば、原子力の安全性にも、独得の見解を持って
いて、「これは、大臣のお言葉とも思えません」と

やるのだから始末が悪い。私は、あとで、この記者に、「あんたのは質問ではないから困る」と強く抗議したが、あのとき以来、大臣の会見数が、めっきり減ったように思えてならない。

女性大臣の近藤鶴代さんは、いつも和服でキチッと決め、やさしい笑顔を絶やさなかった。もう「おばあちゃん」と呼ばれるお歳だったはずだが、ふけ込んだところはなかった。氣どらず、ひと通りの説明をすまずと、わからないことを無理に答えようなどとせず、「これ、どういふんですか？」と、うしろの職員へふりむく様子など、かわいらしくさえあった。暑いとき、当時流行ったムームーをすすめたことを憶えている。

もちろん、佐藤栄作さんも、まじめに応待してくれたが、折りしも政権取り直前、ギョロリとした目玉には、「心ここにあらず」といった感じも見受けられた。

いつも穏和だった木内（四郎）さん。平泉（渉）さんには、外国の原書など例にあげら、むずかしい話をされて閉口した。前田（佳都男）さんは、高熱をおし

て、私の主催する講演会に出てもらった。長田（裕二）さんも、木内さんと同じく、役人出身とは思えないおだやかさを持った人で、しかし、『科学技術博覧会』をまとめあげたしたたかさは、さすがと敬服している。

特異な印象が残っているのは森山（欽司）さんである。この人ほど、役人連に、こわがられたり、いやがられたりする人もめずらしい。例の分析研汚職事件にからみ、いわゆる。モリキン旋風が吹き荒れたのだから無理もない。夜遅くまでがんばるこの人のところには、警視庁から、どんな情報を持ち込まれていたときく。

いろいろ毀誉褒貶はあるだろうが、私は二つのことで、この人を弁護したい。

一つは、何年も、棚ざらし——ならぬ「海ざらし」になっていた原子力船『むつ』を、就航に踏み切ったことだ。『むつ』に手をつければケガをする、そんなムードが支配していたときである。結果は、はじめに終わったが、大切なことだと信じ、敢えて実行する姿勢は評価すべきだ。「事前のつめが足りな

かった」というが、何年も放置した後、持ち出せるセリフだろうか。「仕組まれた」という説まであるくらいだが、とにかく、わずかの放射線（二年中当てもレントゲン検査一回分くらい）洩れで、天下の大事に仕立てあげられる社会環境も困ったものだ。

もう一つは、原子力委員に、東京教育大の宮島龍興氏を持ってきたときだ。森山大臣に対する非難はすさまじかった。念のため、当時の朝日、毎日新聞などを広げてみるとよい。理由は、新しい委員をきめるのに、既存の委員に相談しなかったから、というのである。しかも、原子力産業会議の有沢広巳会長（元原子力委員長代理）までが、「そりゃ怒るだろうなあ」と油をそそぐような発言。そんな中で、田島（英三）委員は、さっさと辞表を出して、大向こうをうならせた。

しかし、これはおかしい。宮島氏個人に異論があるとしても、あるいは選び方に不満があるとしても、委員の座にあって、堂々と指摘すればよい。だいいち、かりにも国会承認人事だ。既存の委員に相

談しなければならぬというなら、それこそ非民主的といわなければなるまい。

さて、いまの中川大臣。容貌はまことにごつい。が、実に慈愛あふるる表情を持っている。むろん、中味が、その表情をつくっているのだ。しばらく接触した人なら、誰（よっぽど悪人でない限り）でも、はれ込むに違いない。政治家が、みんなこんな人ばかりだったら、さぞかしうまくいくだろう。

立往生していた原子力船問題が片づいたのも、この人の誠意が、先方をして「中川さんなら」といわせるまでになったからだ。防衛予算の問題など、はげしいことを言ってるようだが、冷静に考えれば、常識ともいえることだ。

イデオロギー論は別として、言論界も、この人を、本気でけなす材料は見付け得まい。

折角、いろんな偉い方にお会いできるわけであるから、今後はもっと考えながら観察させてもらうことにする。

子供のころ

江島俊雄

(鹿島市無量院副住職)

いのちを考える

五月の青空を鯉のぼりが雄々しくそして気持よさそうに泳いでいる昨今であるが、田舎の方になればなるほど、「節句」(桃の節句、端午の節句両方とも)の行事もかなり派手なかたちにて各家庭でとり行なわれているようである。

たとえば男の子が生まれると、その家の身近かな親族の者たちが「節句」の事前にお祝いとして、鯉のぼりや床飾りセットあるいはおもちゃをプレゼントするのであ

る。その贈られるお祝いも、子どもの家庭の日頃の世間的つき合いの広さと度合いとによって、その数の多少が決まる。

それぞれの庭の一角に、丸太組みの基礎が作られ、そこに建てられた竹や杉の木に高々とあげられている鯉のぼりが、広く世間を泳ぎ回っているかのである。また家中の床の間にも、床飾りセットや男の子のおもちゃが、所せましと並べられ、「子どもの日」前後に仰々しく開かれる「節句ふるまい」の祝宴の座をいっそうにぎやかなものにする。

八百五十年前、なかなか子宝に恵まれなかった法然さまの御両親、漆間時国公と秦氏さまの子どもをこよなく望まれたお気持と、やがて勢至丸さまというすばらしい男の子を授けられ、我が子に大きな想いを託されたお二人のお気持とが、今日の身辺の世俗的とも思われる「節句」の行事をながめてみると、何かしらその心の相通じるものがあるように見られるのである。望まれて生まれてくる子もあり、望まれずして生まれ出てくる子もある今日のきびしい現実生活の中で、このような心温まる「節句」という一つの子どものための行事も、形のちが

いはあるにしても「いのち」の尊さを考えるにつけ、「その祝う真の心」を大切にしてもらいたいものである。

私事ながら、やがて数日後には我が家にも今ひとつその尊い「いのち」が小さな産ぶ声をあげるのであるが、五歳半を頭に五人の子宝に恵まれた一人の親として、「いのち」の大切さをほんとうに考えてゆきたいと思う。「五つ子ちゃんの子育て戦争」とさほど変わらないような日々のめまぐるしい我が家で、初めて「親の恩」を感じながら精進の日暮らしをさせていただいている。

私は二人の兄弟子と五人の実際の兄弟との都合七人の男ばかりの中に育ち、仏縁をいただきながら成長して今日の宗侶の身となっている。小さいころから父親の慈愛に育まれ、拙寺を中心にして活動を続けている子供会やボーイスカウトという集団生活を通して、自分の心と共に相手の心を大切にしなければならぬという「合掌」の心を自然に教えこまれたような気がしてならない。現在ではそれらのすべてを私が継承してやっているが、子供会やボーイスカウトの活動は特に現代の世相、教育に欠けているところの「いのちを尊ぶころ」を育てあげるものの一つとして、大きくその社会教育の一貫になっ

ているものと確信するものである。これらの活動は石にかじりついても継続していかなくてはならない。なぜなら「子どものころ」の中に、法然上人の念仏の心、合掌の心を伝えていく教化の意味があるからである。

曲げられているいまの子どもの心を正しく

よく世間の親たちは、子どもにかける期待を、

○やさしい心の子

○才能のある「頭のよい子」

○体の強い子

と大きく夢をふくらませる訳だが、子どもがだんだんと成長して、保育園幼稚園から小中学校等へと進むに従って、親は悲しみ、苦しみ、心中は悩み尽きない切ないものとなっていくのである。

「三つ子のたましい百までも」といわれる通り、親が正しく育んだ子どもは真つすぐに育ち、親が曲げてしまった子どもは心は、なかなか直らないものである。

子どもをうまうまつかむこつとして、子どもの目と耳、鼻、舌、皮膚といういわゆる五つの感覚に対して、物に触れた時に受ける光、音、匂い、味、寒い暑いや冷

たい熱い感触と呼ばれる五官の刺激を、親が適切にコントロールすることが重要なのである。物の与えすぎ、小使い銭のやり過ぎは、親の自己満足にはなっても、正しい子どもの刺激とはならない。子どもに対する内外の刺激の良い悪いを正しく分別し、良い刺激をきちんと施してやる親側の智慧をしっかりと養わなくてはならない。

子どもの心を親が曲げてしまう大きな原因の一つに、「叱る」方法の正しくない場合が多い。子どもの言動に対して親の都合でとなりちらして「怒る」場合と、子どもの言動に、善悪を分別しながら論ずる（きと）ようにして、教育的配慮をしながら「叱る」場合とでは大きなちがいである。親の無分別な叱る、押しつける、支配するということやりは、素直な子どもの心を育むものとはならない。そしてまた子どもの要求に対して、ただいたずらにダメ、イケマセンという言葉を使ってしまうと大へんなことになってしまう。

また、「受用」の心を大切にしなければならぬ。すなわち相手の要求をまず受け入れてやり、そして無理な要求などは正しく論じてやるのである。受用のできる親子には断絶などはありませんであらう。

親と子ども、子どもと子ども、おとなと子どもの心のかかり合いの中で、

○甘やかすとわがままな子になる

○人に助けられて生きていることを教えると優しい心の子になる

○不便を味あわせると忍耐強く考え深い子になる
ということを親が正しく子育ての中で分別していくことが肝要である。

もし子どもの心を曲げてしまった親があったら、まず親自身の心を正しく直すことが大事な方策である。

手づくりの仏教教化（保育）

五年ほど前より、境内において保育園を新設し、仏教保育を基幹として、法然さまのお念仏の教えに因み、「明かるく・正しく・仲よく」を保育目標として、豊かな子どもの心を育てる保育に動んでいます。

先日、未満児向けの手づくりの字のない絵本「大きなりんご」を保育先生の協力で創作してみました。この絵本を子どもたちに、口述のストーリーをつけて、ページをめくってやる時、既成の絵本では味あうことのできな

い子どもたちの温かい反応を窺うことのできたことは、これも言われぬ充足感となりました。

毎朝登園する子どもは、山門に立って、

「仏さまおはようございます。先生おはようございます。皆さんおはようございます。」

とさわやかな声の子どもたち。

朝のお集まりの体操の後、本堂にあげたのお参り、

○仏さまのうた

○ちかい

(同唱十念)

一いつも手を合わせ、仲よくいたしましょう

二いつも手を合わせ、人々のおかけをよろこばし

よう

三いつも手を合わせ、仏さまの教えを守りましょう

○おはなし

そして、給食やおやつ時には、いっしょに、

「み仏さま、おとうさん、おかあさん、こぼさないように残さないように楽しくいただきます。」

という食前なことばなど、この園でも、日常のことではあるが、口称念仏の教えを生かして、心のこもったことばを保育の一コマに、実際に口で言わせることによつ

て、心の養生に配慮している次第である。

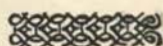
この五月八日はひと月おくれの「花まつり」の行事であるが、今年は法然さまのお誕生八百五十年ということで、寺の和順婦人会と保育園の開設五周年を記念して大法要を奉修する予定である。

午前中は、午前九時よりの保育参観に続いて、音楽法要、御詠歌の奉納やそのあと婦人会、母の会、保育園児それぞれのおゆうぎおどりの発表があり、昼食のあと映画で第一部が終了します。

第二部は、午後三時より卒園児を中心に子供会やボーイスカウトの小中学生を対象に「子どものつどい」で人形劇や映画で楽しんでもらう計画である。「非行のない明かるい子ども」、「手を合わすことのできる子ども」になってくれるよう教化のプログラムを考えている。

お釈迦さまの教え、法然さまの念仏のありがたさを心から喜ばせていただき、浄土宗侶として保育園での乳幼児のための「心豊かな保育」、小中学生を対象としての子供会やボーイスカウト活動等青少年の「こころの育成」に精進努していく日々が、今後も続くのであろう。

浄土句集



医師哀れ患者から風邪うつされて

福岡 原 敬二郎

評 風邪の診察をして風邪をうつされて仕舞う。坊主の無信心、医者の不養生とは

誠なるかな。

老骨の寄れば嘆きの木葉髪

東京 新井 新生

評 年取れば髪が白くなったり薄くなったり、額には皺が沢山になったり悲しいことばかり、万物永く使えば古くなったり役に立たなくなったりは、諸行無常だ。

菅公の御持仏堂に聞く初音

福岡 高良 慈風

一田牛畝選



評 太宰府天満宮は菅公の墓が天満宮で、菅公が彫まれた観音像は宮裏の安楽寺の本尊様で、この寺は浄土宗であり、堂裏には鶯が啼いているのである。

春光に微笑み在于地蔵尊

群馬 島津 か寿

評 春ともなれば地蔵尊が微笑み在于す如く拝める。拝む人によって地蔵尊も泣ける如く、笑める如く、見方によって変る。

遠ざかる電車を包む霞かな

長野 友淵旋風子

評 遠ざかって行く電車が霞に包まれて消えて行く、山国ではこんなことは毎日のことらしい。

丁寧な文添えられし寒卵

東京 猪瀬 幸子

評 丁寧な病氣見舞の文が書かれて寒卵が送られて来たのか、寒卵をすすって一日も早く元気になられよとのことか。

頼もしや道具背負ひて寒稽古

東京 末常てる子

娘等夫婦帰りしあとの炬燵かな

東京 栗原とも子

カトレアの甘き香りのロビーかな

東京 栗原やえ子

源氏山矢倉への径朽葉径

東京 田中 秀代

臘梅や眼の澄む僧の声やさし

山口 上野 明達

大分 丹羽 難中

お誕生八百五十年の法然忌

寒紅梅小さき鉢に溢れけり

東京 満尾衣有子

詠唱の鈴の音響く寺の春

山形 松田 允子

福岡 安藤平次郎

日当りて飛燕の駅となりにけり

故郷のすさび串柿飾り付く

東京 小笠原香祥

ただ一つ残る分校手毬唄

山形 松田 光誓

福岡 荒牧 還愚

あづまの椿む堂の二月かな

探梅を約せし朝の早誦経

福岡 前田 秀峰

縷々として香煙のぼる初地蔵

福岡 上滝津弥音

山梨 青山富貴江

山峡をぬって初音の流れ来し

きんとし申年の梅は葉と賜わりし

福岡 永江 隆説

もてなしの生姜匂へる葛湯かな

福岡 服部 光代

福岡 高良 幸代

大鳴ける辛夷まぶしき散歩道

梅が香や平安仏の気品なほ

福岡 行正 朋弘

金箔の落ちたる袈裟や涅槃像

福岡 行正一如子

三重 森 静枝

いつまでも孫の見送る流し雛

気をゆるしまた引きかえす春の風邪

三重 山田 うた

咲き初めし白桃を先づ供華に剪る

福岡 沢河野ねはん

東京 真野よし子

美容師のはずむ挨拶笹子鳴く

寒風に笑みを崩さぬ道祖神

東京 細田 初枝

久々に夫を誘ふて春の街

福岡 稲永美恵子

東京 吉原登起子

白菜を漬けてひと日の終りけり

亡き人の好みし供花の糸桜

東京 吉田ゆきえ

天平の仏の里の牡丹かな

一田 牛畝



(読)
(者)
(の)
(べ)
(い)
(じ)

仏 法 僧

無量寿の光明をいただき、生れ難き人間に生れ、生かされて生きる此の喜び如何でや。今有難き御法を聞きて、知り見て、悟りて、帰依したいものである。仏説父母恩重經にあるが如く、此の世上に生を受ける群生多けれど、中にも人間に生るるは甚だ稀なり、とあります。又人間に生れ難きこと、如何にして六道を巡りして人間に生れるは、梵天より糸をたらして大海に沈める針の穴に糸を通すが

島^{しま} 田^だ 信^{しん} 一^{いち}

(福井県大野市在住)

如し、と申されて居ります。人間は生れたその時から業が始まります。幼くして、又健やかにして、又老いて、常々に、三つの大きな煩惱が燃えさかります。今、我々が此の世に生れ出たことについて考えなければならぬのは、三世の因縁によってであることを知るべきでしょう。今、生を受けるも過去の因縁であります。喜びあるも、又苦患あるも、此の因縁であります。



次に来るべき来世には、此の苦患ある因縁を少しでも造らずに少くなくしたいものであります。又此因縁を少くするには、仏の御法に帰依することでしょう。

とかく此の世の恵みには、悪業と犠牲が生じやすく、又これらの煩惱があるからであります。此の交錯した人間の娑婆において、煩惱を消すことは出来ません。

新しい、又すばらしい人間社会を造り出すために、人間とは、動物的肉体とその生命と魂とで、此の三つから出来ています。たとえば、此の動物的肉体と生命がほろびても、魂だけは未来永恒に消えることなく残っているのです。般若心経にある如く、不生不滅です。又たとえば、昔から言われている様に、りっぱな人が世に出れば仏さまのようで、どんなの生れ変りだろうか、などと申します。又悪人が出れば、誰の生れ変りだろうかと、よく言われて来ましたが、もしそうだとすれば、姿や形はどうであれ、結局は魂は変るこ

となく永久に同一だと言うことが出来ましよう。

ここで声を大きく申したいのは、此の三世の因縁である浄土と三悪道を、因縁煩惱によって、自分が自分でその道をつくり出してゐるのではないでしょうか。今ある自分の姿を見て、喜びと感謝に於て先祖の供養申上げて、これから来るべきところの来世には少しでも、己の煩惱の患いを残さないようにしたいものであります。

三宝とは、仏さまが、私たちを救うべくところの尊い教えであり、御方便(でだて)であります。仏さまの願いの四十八願の中の第一願に、「設我得仏国有地獄餓鬼畜生不取正覺」とありますが、すなわち、たとえば、我仏得たらんに国に地獄餓鬼畜生あらば、正覺を取らじ、とあり、昔からこれを無三悪趣の願と申しておられます。此のたとひ我仏得たらんと言ふのは、阿弥陀如来が、法蔵菩薩のとき、わたしが仏の境地を得たならばと言うことで



あり、わたしが仏になったならば、わたしの
国に、地獄道、餓鬼道、畜生道、と言うもの
無いようにしたい、もし此の様なものあるな
らば、わたしは仏になれないと申されていま
す。

すなおに此の願いを聞かせていただきま
す。以下に、此の私の思うが様を、つらつら
と書き記してみました。大方の御目に止まれ
ば幸いです。

地獄の炎をはき出す　ほんに思へば恐ろし
い

鬼より蛇より劣つたる　愛想つきた私を
拝む大悲の親様は　慈悲の御目に血の涙
法蔵菩薩とへりくだり　燃えたつ炎に泣き

あかし

五劫に思案の腕をくみ　兆載却火の中や
八寒紅蓮の氷とじ　やがて大願成就して

可愛衆生が蓮台で　喜ぶ顔かみたいとて
御身の若思は打忘れ　久遠劫より此の世ま
で

造りし罪を引きうけて　恒砂無量の功德を
ば

南無阿弥陀仏にたたき込み　必ず案じな
づかうな

助するぞよの御一言　その機そのままそ
の身なり

六字あるだけ我がものと　あとへ戻らぬ不
退転

罪の深きも苦にやむな　罪障功德の体とな
る

障りあるとてひけとるな　一切有碍にさわ
りなし

どうもこの機が根生が　我が機ながめて案
ずるな

ぐずぐずするうち日が暮れる　不足あるな
ら弥陀にきけ

そんならあなたに尋ねましょ　易い易いと



仰しやるが

どうもたのむがむつかしい それより一度

称へたら

助すけてやると仰しやるが よほど易いと

思います

こりゃこりゃそなた何を言う たのめと言

うは只の事

其の一声もいらぬぞよ まるのまるのまる

はだか

はだかのままの仕立どり まだまだ不足が

あらば

えん慮はないからもっと問へ そんなら一

つ尋ねましょ

私は丈夫になれません おまへが丈夫にな

れぬから

たしかな願力ここにある 疑心の暗がはれ

ませぬ

晴らすは光明にしかけた たのみ心がな

いと言うや

六字に南無の機をこめて ゆずり与へてた

のませる

死際案じなまもるぞよ 心細いでおくるぞ

よ

ある罪咎は己がとる もたぬ巧徳は弥陀が

やる

不足の言えぬ御本願 こんな御慈悲をしら

ずして

今までかぶりを横にふり 我が胸ながめた

恥しさ

ほんに今日がいままでも お胸いためたこ

のやつが

聞く気になったも誰じゃない 参つて来た

のも外じやない

せめて一度は一度の 弥陀選択の願心が

釈迦となつて八千度 種々の善巧御方便

祖師上人とあらわれて 上巖山路草わけて

すげの小笠に竹の杖 御足に草鞋の引きし

められ

野路山路(坂)いといなく 雲井に近き大峠

上れば下る七曲り



御足も血潮に染むばかり 谷の水音吹く風も

荒れすまじ畿の国 御宿さへもあらはこそ
昨日も山路で日をくらし 今宵も深山で夜をあかし

その辻堂ここの軒 雨やあられ厭いなく
雪をしとねの石まくら 祖師上人の御辛勞
これもたれゆへ私ゆへ

如来大悲のおんとくは 身を粉にしても報ずべし

受けし御恩の万分の一 口になふた御称

名

朝夕二度のお給仕や 近所となりの御座詣り

お寺まいりもさそいあい 両度の御逮夜か
かすまい

本山お手次おりおりにならぬ中からおて
つだい

あげる心になったのも みな親さまからの
貰いもの

五倫五常は人の道 親に孝行君に忠
たべさすばかりが孝じやない 親の心やす
めるが

衣食にまさる孝行ぞ 我が身の職身のつと
め

骨を惜しまずはたらくは 鉄砲かついで戦
場に

尻をさらすも軍人も 御国につくす義は一
つ

ほそぼそ煙をたてるのも みな先祖のお蔭
なり

年忌追善怠らず 親先祖敬ふて

身の分限を守るのが 家の榮へるもといぞ
や

近所となり友同行 互いに実意つくしあい
かりにもいさかいせぬものぞ やがて浄土

へ参る身じや

負けることには骨を折れ 雪の力にたおさ
れた

竹はそのままおきあがり 仆した雪はあと



もなし

人をたおして我が家が 永くつづく筈がない

己の心すぐなれば 人には鬼はなきものぞ
殊に女のつつしみは 人の蔭口ぐち小言三

人寄れは姦しい

とくにならぬ長話 我が身も人から誇らる

と

氣付かぬ心の浅ましさ かりにも言葉つつ

しんで

我が身のうへを省りみよ 朝夕鏡にむくと

き

心の垢を掃除せよ 操を破るは此の世から
監獄に縛る罪としれ 夫の心慰めて かり

にも悪い顔みせな

子供は家の宝ぞと 心の教へ怠らず

親子夫婦が友同行 互に引き立て引き立て

て

今生ばかりが親じゃない 此の世ばかりが

夫婦かは

先き立つものはあとを引き おくるものは

先を追ひ

介抱している妻も子も かなしい別れは今

しばし

未来もともども蓮台で つきせぬ楽しみ今

のうち

こひしい親も同胞も 芽出度浄土で逢ふぞ

と

互いに慕ひしたわれて笑って暮すも お慈

悲からどうせ此の世は堪忍土

こらへてくらせ雪の梅 仏の法をうけてみ

て

堪忍ずよい人もある 称名氣付かぬばあの
通り 今聞く身にそだてられく聞かして頂

く身じゃおもへ

南無阿弥陀仏の花さげた 人から寄ける小

路かな

只なに事も前世の 定める業を悟りて

ただ一向に念仏すべし

南無阿弥陀仏

合掌



念佛ひじり三国志

(空六)

—法然をめぐふ人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



小松殿——

平重盛の旧邸を言う。「拾芥抄」の京程図には「八条ノ北、堀川ノ西ニアリ」と誌される。現在の京都駅付近だろ。東山の小松谷とはかなり隔っている。

「平家物語」によると、木曾義仲の軍勢が迫った寿永二年（一一八三）の七月、平氏一門は都落ちをするが、この折六波羅、小松殿、八条、西八条の屋敷二十八余カ所をすべて焼き払った、とある。小松殿も灰燼に帰したの

である。

平相国清盛を八条太政大臣と呼んだことでも明らかのように一門の宿所は八条の堀川周辺に群立していた。清盛自身は八条の北、坊城より西方一町のところに住み、庭には蓬（よもぎ）を植えて朝夕これを愛でたと伝えられる。妻の二位ノ尼は八条坊門ノ南、宗盛邸は八条ノ北、高倉ノ東。頼盛の新邸も八条坊門ノ南、烏丸ノ西、であった。

流罪直前の法然が、吉水の禅室と半々に暮していたと言われる小松殿は、もちろんこの旧邸ではない。平重盛はその存命中、治承二年（一一七八）のころ東山の麓に新

しい御堂を建立した。阿弥陀如来、四十八願にちなんで「六八・四十八間」の御堂だった。

東山の麓。

そこは渋谷越（しるたにこえ）と呼ばれる阿弥陀カ峰の北麓を経て山科へ抜ける谷合いの道だ。苦集滅路（くづめじ）とも呼ばれた。

「平家物語」は「灯籠」の段で堂内の荘厳を次のように紹介する。

四十八箇の灯籠が吊られ、灯がはいれば極楽浄土、九品の蓮台が現前したようなまばゆい輝きだ。娘ざかりの女性が一間に六人づつ、四十八間に二百八十八人が居並び、その前を念仏を称える尼衆が行道する。列中には平重盛自身も加わっていた。

江戸の儒学者伊藤梅宇（仁斎の子）はその「見聞談義」で、「平家物語」とは少々異なるかと断わって小松殿を描写している。

十二間四面の結構で十二光仏を一軀づつ安置した。四十八人の女房、上は二十歳、下は十六歳、ことに美形なのをえらんで「日没間ニ礼讃シ念仏トナエテ四十間ヲゾメグリケリ。ソノ後六人ヅツ番ヲ結ンデ鼓銅鉸子ヲハヤ

シテ今様ヲ歌イテ、又四十八間ヲメグレリ。心ノ闇ノ深キヲバ灯籠ノ火コソ照ラスナリ、弥陀ノ誓イヲ頼ム身ハ照ラサヌ所ハナカリケリ」と、堂宇内を文飾する。

重盛がこの小松谷御堂を建立した動機だが、前年に惹起した鹿カ谷事件に求められないであろうか。この事件で重盛は妻の兄で、長男維盛の嫁の父でもある新大納言成親を失っている。それも平氏打倒の陰謀に加担したかどで備前へ流罪となったが、配所へおもむく途次父の清盛の手で虐殺されたものである。

鹿カ谷の首謀者は後白河法皇であり、成親大納言は「陰の近臣」として席へつらなただけなのにこの断罪だった。重盛の無常観は深刻となって、阿弥陀仏の救いを心から求める心境になったはずである。

それだけではない。重盛自身が翌治承三年七月二十九日、四十二歳で没している。臨終の折、法然がその善知識をつとめたという説もある。

法然がこの小松谷御堂に住したのもそんな法縁によるものであろうか。

平重盛はこの小松谷以外にも灯籠堂を建立している。五条ノ北、東ノ洞院にあった多聞山浄教寺がそれで、付

近一帯を灯籠町と呼んだという記述が「山城名勝志」にある。天正年間にこの浄教寺は四条南、京極ノ東へ移転している。

法然が籠居していたころの小松谷御堂。美女は言わずもがな、まばゆい燈籠もともされなかったはずである。堂宇は荒れ朽ちて狐狸の棲み家に近かったのではないだろうか。

建永元年（一二〇六）の七月、つまり此処から法然が流罪の旅へ登らされるほど半歳前、こんな歌を詠んでいる。

小松とはたれかいひけんおぼつかな

雲をささふるたかまつの木を

荒涼たる小松谷の風趣がしのばれる。小松などと可憐なおもむきでは微塵もない。妖しい時代の雲ゆきを支えていなければならぬ「高松の木」ばかりだ、とても言いたかったのである。

では妖しい時代の雲ゆきとは何か。もちろん法然及びその一門を見舞っている法難の嵐だが、この小松谷には

別な意味で激流を象徴する標（しるべ）があった。

それは九条兼実の次子で、この建永元年の三月に奇怪な死を遂げた太政大臣良経の墓である。

三条長兼の「三長記」によると同じ建永元年九月六日、良経の墓前供養が営まれている。導師は「十六門記」の法然伝を書いた聖覚僧都で、臨席した慈円僧正も感懷を一首に托した。

あとふりて神さびわたる小松原

けふやみにしむ秋の谷風

さらに十五年後の承久二年三月七日の祥当忌には、

いづことは小松の谷の春風に

散りても花はまた匂いつつ

九条良経の死は「謀殺」だったと言われる。あの晩、天井裏へ潜入した刺客が、吹き矢を用いて、とまことしやかに伝える史書もある。すべては不明だ。三十八歳、とみに健康だった男の急死には諸説が乱れ飛ぶ。しかも

良経の立場が上昇気流に乗り切っていたとすれば、なおさらであらう。

この奔放な天才歌人は、近年ようやく政治になじみ興味をいだきはじめた。政策路線は父の兼実と一心同体、鎌倉との協調にあった。四年間に及ぶ摂政の地位で、良経は鎌倉に若きホープを歌道をとおして発見する。源家の正統実朝であった。

実朝が將軍になるや良経はその御台所として名門坊門家の娘を鎌倉へ送りこむことに奔走する。婚儀成って東西の対立は解消し、良経自身も娘の立子を中宮として入内させる話がほぼ決定した。九条一門をあげて曲水の宴を張って、治平を謳歌しようとする矢先であった。

ケチのつきはじめは熊野本宮の焼亡を理由として後鳥羽院が曲水の宴への出席を拒否したことだった。宴は取り止めとなり、失意に悶々としていた夜陰の出来事である。

良経の急死は、復活した九条家の上昇機運を一気に失落させた。父の兼実が病いに取りつかれ、娘立子の入内も沙汰止みとなった。実現は五年後である。

失落した九条家にあつて、ひとり後鳥羽院のおおぼえ

目出たく、政界のトップへ躍り出たのは兼実の弟吉水の僧正慈円である。

慈円自身が書いた「愚管抄」で、

山ノ座主慈円僧正トイフ人アリケルハ九条殿ノ弟ナリ。ウケラレス事ナレド、マメヤカノ歌詠ミニテアリケレバ、摂政トヲナシ身ナルヤウナル人ニテ、必ズ参リアヘト御気色モアリナレバ、ツネニ候ケリ。院ノ護指僧ニハ昔ヨリ類イナク頼ミ思召シタル人ト聞エキ

三人称で自己を取り上げて、しかも賞め千切っている。ために近代の学者などは「愚管抄」を慈円の作ではあるまい、などと疑ぐる人もある。

だが当時の貴族がしばしば用いる手法であつて、逆に「語るに落ちた」裏面を覗かせる小細工とさえ言えるであらう。

「摂政トヲナシ身ナルヤウナル人」とは摂政と同格の地位を与えられたという意味だし「必ズ参リアヘト御気色モアリケレバ、ツネニ候ケリ」とは後鳥羽院の信望厚

く、いつも傍らにいて欲しいと懇望されるので伺候怠りなかったのだ、と誇示するのである。

俗な言い方をすれば、良経の急死を踏み台として、九条家の失落を好餌として後鳥羽院の腹臣へのし上がったということである。

当然、建永元年の九月、小松谷の良経の墓参時における諷詠にも勝利者の高姿勢が感じられる。

神さびわたる小松原……仏者が故人を供養する風懷であろうか。

一一

荒れはてた小松谷御堂が松林越しに見えてきた。谷合いを吹きぬけてゆく風は冷めたかった。

「此処へは昔、一度きたことがあります」

生蓮房宗実感慨の眼をしばたかせて、つぶやいた。

「小松内府が存命だったころですな」

平重盛の子である。灯籠堂の落成で訪ねたのは当然だろう。父に手を引かれて松林を歩く幼な子の姿を、住蓮

は思ひえがいた。

「いや、すでに父が薨じたあとでした。左大臣に連れてこられたと記憶しております」

「大炊左府（経宗）殿ですな。まだ灯籠も吊られて……」

「はい、夕景でしたが、堂内へ入ってしばらくお籠こもりをしていましたら、いっせいに十二光仏にお燈明が灯りました」

「さぞや美しかったですね」

何度か此処へは足を運んだ住蓮だったが、そんな莊厳にふれたことはない。誰が持ち去ったのか、吊られていたという灯籠はおろか十二光仏までが失われてしまったのだ。

「美しい？」

宗実は遠い日の印象を正確に告げようとして、じっと考えこんでいる。

住蓮はいったん停めた歩みをつないだ。無理に追究しなかった。

「美しい、というよりも何か恐ろしい気がしたのをおぼえています」

ようやく宗実の声が追ってきた。

「恐ろしい——」

「そうです。恐ろしくて全身の毛穴がしぼんでゆくようでした」

「極楽浄土の荘厳が、恐ろしかったのですか」

「あれは……阿弥陀如来のいますお浄土ではありませんまい」

「うむ」

「あんなけばけばしい場所に私たちが願っているお浄土はないはずです。あの灯籠の輝きは魔の光りです。魔界の輝きです」

果たして幼き日の率直な印象だったかどうか。念仏ひじりとなったあとの知識が入りまじっているのではあるまいか。それ以上に恐ろしい体験が、小松谷御堂の思い出にどぎつい色彩を塗りとくったのかもしれない。

恐ろしい体験とは寿永二年の平家の都落ちだ。昨日までの権力をほしいままにした縁者たちが無力化し、狼狽して逃げ出してゆく。その平氏におもねり続けた養家の大炊御門家の人々が宗実を犯罪者として敵の手に突き出そうとする。

たしかに灯籠大臣重盛の血を享けたという事実が、今

や断頭台へ登ってゆくための拭ぐいがたき烙印に変わってしまったのである。灯籠の輝きは魔界の光り——

住蓮はふと、あることを思いついた。

「近ごろ、新しく灯籠堂が建立されましたよ」

「どこにですか」

「吉水房に熾盛光堂が造営されたのです」

「さっき登った禅室の近くですか」

「すぐ下の森です。青蓮院の境内になっていますが、そこにある古い池のほとりに建ちました。吉水の僧正が願主となって、熾盛光法を修するんだそうです」

「熾盛光法 それは何ですか」

「さあ、私も知らない。叡山に伝承する秘法らしいですな。万堂を明々と照らし出して、三昧流の灌頂に聖水を沢山使うようですよ」

住蓮の知識も心もとない。

吉水の僧正——慈円である。

慈円は、もと三条白川橋の袂にある堂宇を住居としていた。後鳥羽院の強い要請で、この堂宇を提供した。最勝四天王院である。鎌倉の武家政権調伏を祈願するとともに倒幕の密謀を練った場所である。その執行が尊長

僧都だった。

白川橋を離れた慈円は、昨建永元年の七月、青蓮院の一角に大懺法院を造営、熾盛光堂を付属させた。後鳥羽院はおしのびで、しばしば此処を訪れている。

熾盛光堂の説明を生蓮房宗実にしなから、住蓮はふと最新の情報を思いうかべた。後鳥羽院の意志は、法然に最勝四天王院の堂主となるように、と強要してきているという。つまり専修念仏教団をあげて鎌倉政権打倒を祈願させようというのだ。

この情報源は慈円僧正の筋から洩れたものだ。山の念仏者として、ましてや実兄九条関白兼実があれば心酔している法然を、慈円僧正はなぜにここまで憎むのであろうか。

「愚管抄」で書かれた慈円の文章は、法然念仏を悪しざまに罵っている。にもかかわらず終段へ至ると、公武合体を主唱し鎌倉倒幕へ暴走した後鳥羽院政をも鋭く批判する。だがそれは承久ノ変という「結果」を見ての取りつくろいの感じが強い。

すくなくともこの建永の時点、慈円は後鳥羽院と密着し、倒幕路線を歩んでいた事実を、行動が明示してい

る。

慈円は熾盛光堂で、人工のまばゆい熾光を万堂に灯もし、極楽浄土への道を明るく照らそうとした。

法然は自然の月光に頼った。かぼそい光りではあっても信仰のひとすじ道を大切なものとした。人工の熾光はかえって邪信をふくむと退けた。

現在、浄土教団が宗歌としている月かげもじつに熾盛光ではない大衆が差別なく浴し得る阿弥陀仏の慈悲を、それを欣求する法然の真意を伝えたものにほかならないであらう。

住蓮と生蓮房宗実とは、ほどなく小松谷御堂へ到着した。

ただっ広い御堂は、そうでなくても寒気が身に沁みた。谷の風が吹きとおしなのである。

若い侍者の勢観房源智が一人、堂内にいた。

「お聖人さまは？」

「裏殿の方で……」

一切経を披読中だという。法然はいつ如何なるときにでも経巻を手離そうとはしない人であった。

「そうだ。こちらにはな、勢観房どのの叔父上にあたるお

方」

と宗実を紹介する。

勢観房源智は平重盛の孫だった。父の師盛は宗実の兄である。

だが、今さら紹介をされても二人は浅く頭を下げ合うだけであった。同じ血筋をなつかしみ合っても、それが何になろうか。平家の一門だったという事実だけでも彼らの胸を重く閉ざしてしまうのである。

ふたりに共通の話題が出そうにもないので、住蓮は源智に問いかけた。

「そなたは、たしか吉水の僧正のもとで受戒、得度をしたのだったな」

「はい」

十三歳になって、いったん法然に引き取られた源智は、正式な沙弥となるべく慈円のもとへ送られたのだった。

「あの僧正はどんなお人柄であったかな」

「どんなお人柄とおっしゃっても……」

返答に困っている。

「白川の房にいたころ、記憶に残る思い出は？」

「さようでございます。初めて参上した折、おっしゃった言葉が強く胸に刻みこまれました。わしも十三歳で出家した。そして、みなし児であったと」

「みなし児か」

たしかに慈円は十歳の折に父の関白忠通に死なれていく。九条兼実たちと共通の母だった加賀局と死別したのは二歳の折である。

みなし子のたくひ多かる世なれども

ただ我れのみと思ひしられて

慈円の詠である。

三つ子の魂と言うか、やはり慈円には「ただ我れのみと思ひしられて」という独生独死の強靱な意慾がその生涯をつらぬかせている。

それと、この僧正の身辺には生涯を通じて女色の匂いがない。出家の身であれば当然、と言ってしまうべき程度だ。だが当時の、とりわけ高貴の出自の僧たちは俗人以上に女色が激しかった。

真摯な求道者として生きぬいた慈円が、自由奔放な専

修念仏者たちを極端に毛嫌いしたのは自然な流れだったかもしれない。

三

「このような場所で、お身に障りがございませぬか」

やがて現れた法然に宗実を紹介したりしたあと、住蓮は訊いた。

「面白いもので近ごろ、めっきり強くなったようだ。ひところの病いも全く出てこない」

なるほど血色が冴えている。ひところ悩んだ瘡の病いなど、どこへ消え失せてしまったのか。

「何かいい薬餌でもございましたか」

「往生が迫ったからであらう」

「……」

「往生を願う者にとって、その目的が近づくと身心にいちだんと生気がよみがえるものだ」

「往生が迫るとは、どういうことでしょうか」

「この調子だと住蓮、病いで死ぬようなことは当分あるまい」

法然は磊落な口調になった。

「さようでござりましょうとも」

「とすれば、自絶はあり得ないゆえ殺されるだけだな」

「滅相もない」

「いや住蓮、充分にあり得ることだ」

「何か根拠でも」

「先ごろもな、善恵房がまいって、吉水僧正のお考えをとくと伺った」

善恵房は法然の弟子証空だ。後の西山上人である。

「吉水の僧正は近ごろ熾盛光堂を造営なさって、秘法にはいられたとかいう話ですが、どのような秘法なのでしょう」

「山門四箇の大法、その至極とされたものだ。これは円仁阿闍梨（慈覚大師）が天台山より伝えたもので、天下泰平のための祈願だ。法華経を終日誦し、夜を徹して念仏を唱え、衆罪を消滅させるのだ」

智恵第一の法然房であった。天台の教義、秘法加持はことごとく知り尽していた。

「吉水の僧正によると、この国をおおうている悪は……」
武権諍斗だという。

かの保元、平治ノ乱から源平の戦いへかけて、この国で幾人の武士たちが死んだであらうか。八万四千をこえる。これは先年、鎌倉幕府が八万四千基の供養塔を建てた数字である。仏典、八万四千の経巻にちなんだもので、無慮という意味であらう。

彼らの怨霊を鎮め、生ける者は懺罪にこれつとめ、二度と戦乱のない世の中にする。慈円が慈覚大師このかた久しく絶えていた法華懺法を、西方懺法を吉水の地に復活させようというのである。

「ことさらに吉水の地をえらんだのは？」

住蓮はようやく熾盛光法の実体が把握し得て、慈円の意図へ一歩踏み入れてみたくなった。

「座主阿闍梨のゆかりたる青蓮院の地内だからであらう」

法然は冷静に答えている。

「そうではありませんまい。すぐ近くに専修念仏の本拠地があるからではありませんか」

「うむ……それもないことはない」

暗黙の肯定に住蓮は勢いづいた。

「目的はその一点に違いありません。総懺法を妨げる者

は専修念仏の徒だからです。念仏一行で、他をすべて退け、懺悔すべき身が弥陀の慈悲に許されているゆえ、胸を張って生きよ、などと説くからです」

生蓮房宗実も黙ってはいられなくなったようである。

「武人兵士の怨霊を慰めると申しますが、戦禍やそれに伴う飢餓によって死んでいった民草の霊はどうなるのか。ございましょうか。彼らに怨霊はないと言うのですか。弥陀の慈悲大悲以外に慰める道は残されておりませぬ」

「……」

法然は静かに瞑目したまま、それ以外の発言は控え

た。

宗実は言葉をかさねた。

「亡卒怨霊を浄土の蓮台へ導くとは申しますが、たしか山の勧学会の祈禱は、太上天皇の宝寿長遠を祈り奉り、一天四海、安穩快善を願っているではありませんか。そのようなことで民草の怨霊が鎮まるでしょうか。私事にわたりますが、平家の一門は壇ノ浦で太上天皇ともども海底へ沈んでいったではありませんか。安徳帝はすでに廃帝で、都の後鳥帝こそ真実の太上天皇だと理屈をこねますれば、宝寿長遠を祈る帝位すら人間わざであって、

利害得失で動かされているということになります」

慈円がこの建永先年の秋から開始した熾盛光法は、言ってみれば民のためでもなく、国のためでもなかった。

後鳥羽院のため、彼が支配する朝廷権力の擁護以外の何ものでもなかった。

この時点で慈円は数々の歌を詠んでいる。

君をのみ思ふ心は大原や

よにすみがまの煙にもみよ

いかでなほ鶴住む洞に生まれても

なからむ世まで君を祈らん

ふして思ひ起きて数ふる万づ代は

神ぞ知るらん我が君のため

身ばかりは猶もうき世をそむかばや

心はながく君にたがはで

千早ふる神ぞ知るらむわが君の

ねてもさめても祈る心は

同じ念仏は唱えていても、人間の裸を丸出しにしてそっくり阿弥陀仏にゆだねてしまう専修念仏と、人間のし

に政治権力をつねに押し頂く山の念仏とは、大きなへだたりがあったのである。前者は解放された自由の念仏であり、後者はあくまでも従属下の祈りであった。

慈円の念仏、その信仰が如何にあいまいであったかは、承久ノ変の翌年「すでに建保六年（一二二八）以後は熾盛光法の修法は中止している」と釈明がましく書き付けている。さらに別の文章で「語ノ及ブ所ニ非ズ。心力ノ測ル所ヲ非ズ。君ノ積悪至極シテ、宗廟、飢ヲナスカ、代ノ時運、末ニノゾンデ社稷、政ヲ失ウカ」と公言する。

心はながく君にたがはで……だった後鳥羽院がわずか十数年後には「君ノ積悪至極ニシテ」となってしまうのである。

それにしてもこの建永二年の二月、住蓮は小松谷御堂へ坐りこんで、もはや師の法然を守る道が一本しか残されていないことを思い知った。

堂外にはすでに宵がきていた。如月の冷めたい月光が朽ちた屋根の隙間から洩れる。ひとすじの月の光り。だが万堂をまばゆくうつし出した灯籠の熾光を遙かにしのぐ真実の光線だったはずである。

（つづく）

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただいております。誠にありがとうございます。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)

一、枚数 四百字用紙五枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十七年 四月二十五日 印刷
昭和五十七年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
千二〇三 振替東京八一八二一八七番



法然上人ご誕生850年を慶讃して
「わたしらの勢至丸さま」をおまつり下さい。



伊勢教区の可愛いおてつぎ子供奉仕団の心のこもった蘸金によって、勢至丸さまのご銅像が和順会館前に建立されました。各ご寺院の前庭に、幼稚園に、保育園に、ご誕生850年を慶讃して、ぜひ端然と合掌される《わたしらの勢至丸さま》をおまつり下さい。

ブロンズ製

比叡山延暦寺大仏師 松久朋琳先生彫像

大型 高さ 68cm 巾 90cm 奥行 48cm

小型 高さ 33cm 巾 45cm 奥行 24cm

大型像謹納先御芳名

京 都 総本山 知恩院様	東 京 大本山 増上寺様	大 阪 守 口 来称寺様
京 都 佛教大学幼稚園様	岩 手 花 巻 広隆寺様	兵 庫 尼 崎 甘露寺様
京 都 東山学園幼稚園様	三 重 鈴 鹿 悟真寺様	鳥 取 鹿 野 幸盛寺様
京 都 文教短大幼稚園様	尾 張 一 宮 剱正寺様	山 口 仙 崎 円究寺様
浄土宗 吉水会御寄進	鳥 取 賀 露 東善寺様	愛 知 豊 川 上善寺様
沖縄袋中国様	鳥 取 布 勢 極楽寺様	滋 賀 草 津 教善寺様
滋 賀 野 洲 福泉寺様	滋 賀 信 楽 法蔵寺様	岐 阜 八 幡 洞泉寺様

大 卯 大 本 家

株式
会社

大西法衣佛具店

〒605 京都市東大路通知恩院バス停前
電 話 (075) 541-3377(代)

郵便振替/京都-2294

取引銀行/第一勧業銀行 四条支店
富士銀行 河原町支店